茅ヶ崎市教育センター

子どもたちのために
ともに教育環境を考える
教育センターの教育情報誌

学びあう 響きあう

第20号
令和 6 年4月発行

編集担当／茅ヶ崎市教育センター
所在地：茅ヶ崎市十間坂三丁目5番37号
研究研修担当（市青少年会館3階）
☎ 0467−86−9965
青少年教育相談担当（同館2階）
☎ 0467−86−9963
https://www.city.chigasaki.kanagawa.jp/kyouiku/1005049/index.html

教育センターでは、「教育研究」・「教育研修」・「教育相談」の推進をしています。

【第 20 号Contents】

P.1　令和5年度「幼児期の教育・家庭教育」講座・講演会のあしあと
P.1〜5　幼児期の教育　ふりかえり〜14 年目のあゆみ
P.6.7　茅ヶ崎市小学校中学校創意工夫・研究作品展のお知らせ
P.8　青少年教育相談室から

教育情報誌バックナンバーのページからダウンロードできます

令和５年度「幼児期の教育・家庭教育」講座・講演会のあしあと（4講座とも、動画配信もしました。）

名　称	開催日等	講師（所属／専門分野）・内容等
第13回響きあい教育シンポジウム	7/28（金）開催 【動画配信】 9/22〜11/24	講師 **遠藤（えんどう） 利彦（としひこ） 氏**（東京大学大学院教授/発達心理学、感情心理学） **北島（きたじま） 歩美（あゆみ） 氏**（日本女子大学カウンセリングセンター専任研究員） テーマ「子どもの自尊心を考える〜乳幼児期から思春期・青年期の育ち〜」 講演及び本市教育長と鼎談（ていだん）
第20回乳幼児期の子育ち・子育て講座	8/28（月）開催 【動画配信】 10/4〜12/4	講師 **岡本（おかもと） 依子（よりこ） 氏**（立正大学教授/発達心理学・親子コミュニケーション） 講演「子どものことばに耳を傾けよう〜心の育ちをみつめる〜」
令和5年度茅ヶ崎市教育講演会	10/20（金）から12/19（火）までオンデマンド配信	講師 **ヨシタケシンスケ 氏**(絵本作家) 講演「自分の居場所　探しに行こう」
令和5年度幼児教育研修会	1/12（金）開催 【動画配信】 2/16〜4/15	講師 **須永（すなが） 美紀（みき） 氏**（こども教育宝仙大学教授／保育学・幼児教育学） 講演「かかわりの中で育つ子ども〜つながる心、広がる世界〜」

幼児期の教育　ふりかえり　〜14年目のあゆみ

令和5年度は上記の4講座・講演会が開催されました。今号では、その中から2つの講座の内容を紹介します。

令和5年度茅ヶ崎市教育講演会より

自分の居場所　探しに行こう
ヨシタケシンスケ　氏

教育センター所長によるインタビューで様々なテーマについてお話を伺いました。

苦手なことは気づきやすいが、得意なことはどう気づきましたか？

自分が何が苦手か不得意かはいくらでも話せるんですけど、何が得意かを見つけるのは昔も今も下手なんですよね。自分の夢を見つける時に、自分はこれが得意だから、好きだから、こうしたいって、ポジティブな見つけ方が良しとされていて、機械いじりが好きだから自動車を修理する人になりたいとか、真っ当な夢の見つけ方に対してすごく憧れを抱いたし、そうじゃなきゃいけないんじゃないかと思ってたんです。だけど、僕は団体行動苦手だから大きな組織でやっていくのは難しいだろうとか、電車に酔う子どもだったから遠くに通勤とか無理だろうとか、できないことならよく分かってたんです。じゃあ何なら我慢できるのか、嫌なものから引いていって残ったものを選べばいいじゃないかって後で気づくんですけど、当時はそういうネガティブな将来の見つけ方ってあまり良しとしてない風潮で、苦しんだ覚えがあって。今でも仕事をしていく中で、そういうふうに物を決めていってもいいじゃないかと思うんですよね。僕も得意なこと、こういうことならやって楽しいな、得意だなって分かるのは、大学の後半からなので、当時の僕が、今の僕のことをびっくりすると思います。「いや分かんないもんだよ将来」、「自分が一番なれない、ならないだろうと思ってたことになったりすることがあるんだよ」っていうのを、自分や自分みたいな人に教えてあげたいって思います。

作家として絵を描き続けること、作品を作り続けていくことの意味や価値はどんなことでしょうか？

僕にとって絵本を作ることの一番のモチベーションっていうのが、子どもの頃の僕が知りたかったことの答えを、当時の自分に教えてあげるっていうのなんですよね。その頃は臆病だったし、怖がりだったし、色々なことが不安で、ずっとモヤモヤしてきましたから。でも 40 歳にもなると色々なことが分かってきて、あんなに心配しなくてよかった。ちっちゃい頃にそういうふうに言ってもらえたら、もうちょっと気軽に悩めてただろうな。だから、先生とか親とかが言うことあんまり真に受ける必要なかったな、みたいなことが色々出てくる。それを絵本の形で、当時の僕に贈るというか、大丈夫だよ、どうにかなるよ、というようなことを言ってあげたい。教えてあげたいっていうのが、一番のモチベーションですね。当時の僕みたいな引っ込み思案の、自分に自信のない子はどの時代にも、どの国にもいらっしゃるので、そんな僕みたいな子に教えたいっていうのはすごくありますね。

自信がなくて何が得意かも分からなかったけど、得意なものが分からないままでも大人になれるし、数少ないできることの寄せ集めだけでもどうにかなるんだよ。それは決して人から非難されるようなものじゃないんだよって、教えてあげたいし、当時の自分と今の自分に言い聞かせるために、僕はその「表現」ということをやっているんだな、と日々思います。

翻訳された絵本が海外でも賞を受賞されています。海外でも評価されたことをどう受け止めていますか？

びっくりしてます、すごく。僕の本は日本人ぽい言葉がよく出てくるんです。何とも言えないような、これどうやって翻訳するんだろうみたいな言葉ばかりなんで。僕自身、出る杭になっちゃいけない。イエスとノーでもないグレーな部分でどうにか誤魔化せないかみたいな、日本人的なところをすごく増幅させた人間である自覚があって。だから、自分の本が海外でも読まれるっていうのは、全く想定してなかったので、いまだにびっくりするしラッキーだったなと思うんですけど。ただ、色々な本で取り上げるテーマが、あまりその国とか文化に実は左右されてないっていうところは、海外でもお声がかかる理由の一つだったみたいで。「もう脱げない」という絵本も海外で賞をいただいて、その時のコメントで、「あなたの『もう脱げない』という絵本は、面白かった。世界中で子どもは服が引っかかってる。子どもはみんな頭が大きいからナニジンでどの時代だろうと、この現象は世界中で起きている。ただそれを絵本にしようとしたのは、あなたが初めてだ」と言ってくれたんですね。それを聞いてすごく嬉しかったんですよ。

当たり前すぎて、通り過ぎてるようなものが世の中にたくさんあって、その当たり前すぎていちいち考えないほどくだらないこととされていることって、本当にそんなにくだらないものなんだろうか。どうでもよすぎて皆、気にも留めてないけど、これって実は面白いんじゃないとか、そういうことを見つけられた時、僕はニヤッと嬉しくなるんです。世界の人にも、ニヤッとしてもらえたのはすごく嬉しいし、国を越えても、すねをぶつけると痛いし、お腹がすくとしょんぼりするし、お母さんに褒められたら嬉しいんですよね。

だから国とか文化とかにかかわらず、喜びとか悲しみとか、たくさんある共有できる部分を拾っていけば、割とその国境が関係なくなったりすることもあるんだなっていうのは、思いましたね。

自分の居場所はここだな、というイメージは持っていますか？

ここは無理だな、ここは無理だなって、逃げ続けて、ここならいいんじゃないかっていうのが自分にとっての絵本作家だった感覚がすごくあって。オアシスがあって、そこを目指して見つけてきたっていうよりは、ちょっとでも居心地の良いところ、ましな部分、ましなところを探し続けて今があるような感じで。でも、居場所って基本的にはそういうものじゃないのかなって気がするんです。だから、それこそヨシタケ家の家訓として、人生のピークは遅い方がいいって、僕が唱えてるんですが、それは何より僕自身が遅咲きの人間で、色々やって、良い言い方をすると、右肩上がりなんです。ずっと子どもの頃は辛かったですけど、ちょっとずつ自分の居場

所も自分の都合のいい場所に移動していけた感があるんで。大器晩成って便利な言葉が世の中にあるし、大丈夫だよ。まだ先が長いんだから、ちょっとずつ自分にいいことを拾い集めていけばいいんだよと。自分が見つけたものはなくならないから、自分の拾い集めてきたものを、自分の大事な場所にしまい、そこを自分の居場所にすればいいんだから、みたいなそういう感覚が大事な気がしていて。

僕は、色々なことから逃げてきて、結果的にうまくいったので、逃げていいんだよって言っちゃいますけど、それは努力して努力して戦ってきた人には、受け入れがたい世界感なんですよね。それはその通りで、逃げちゃ駄目だって生きてきた人は、そのことしかお勧めできないんです。でも、どっちの生き方が間違ってるとかは全然なくて、どっちが向いてるか、やって楽しかったかってだけだったりするんですよね。

それから子ども達に、今後伝えていかなきゃいけないと思うことは、君達は今後色々な大人達が色々なこと言うと思うけれども、それはあくまでもその人にとっての成功体験なだけであって、それを君が目指す必要はないんだよと。あくまでも個人の感想、経験ですと。だからこそ色々な人の経験を聞いて、40 歳で初めて自分の居場所が見つかる人もいるんだ。そういう中で自分はどういう道筋が楽しそうかな、面白そうかなっていうのを選べばいいわけであって、見本が一人二人しかいないと、どうやらこの方法は自分には向いてないぞとなった時にどうしていいか分からなくなっちゃうんですよね。

居場所っていうのはあるといいかもしれないけど、なきゃいけないものでもないんだよ。居場所がコロコロ変わってる方が安心できる、楽しいって人もいっぱいいて、自分の居場所が狭い方が落ち

着くって人もいるし、広くないと嫌だって人もいるし。自分にとっての居場所っていうのが、一つのイメージだけじゃないんだよって、ごく当たり前のことを具体的に、幾つ見せてあげられるかが、大人が子どもにできることの、唯一最大のことなんじゃないかなって。具体例をたくさん見せて、君達が自分にとって腑に落ちるものを選べばいいんだよ。ただ、システム上、みんなで同じ方向向こうみたいなこと言わなきゃいけないけれど、最終的には、みんなバラバラの人生を歩んでいく時に、色々なその例っていうのを見せてあげられるっていうのがやっぱり大人ができることの一番大事なところのはずです。

自分に向いてることが見つかりますようにっていうか、何かそれを祈りを基に、一緒にやっていくっていうのが多分、親子関係でもそうだし、学校、学年、先生と生徒の関係でもそうだと思いますし。

いつか居場所が見つかるといいなあと。ただ焦らなくて大丈夫だよ、あればいいけど、なくてもどうにかなるというかね。居場所っていうもののイメージみたいなものを、もうちょっとフニャフニャさせた方が、安心して、目指せるんじゃないかなっていう思いがありますね。

子どもたちへ向けて考えることや物を作ることについてのメッセージ

最終的には色々な大人がいるし、色々な人になればいい、だけの話ではあるんです。一人で生きていけるようにしていく。そのために何ができるかっていうのが一つ学校としての究極の目標だと思うんです。平均点とか偏差値云々ではなくて、一人で生きていく力を付けさせる。その言い方として、君達は今後一人で生きていかなきゃいけない。そのためには、こういうことを知っておかなきゃ、できるようになっていかなきゃ、君達は大変な目に遭うみたいに、なりがちだと思うんです。

それはそれで全然間違いではないし、そういうところで物を教えていく。色々な選択肢を見せていくってことは大事だと思うのだけれども。でも、生きる力みたいなものを教えていく時の言い方って、実はそれだけじゃなく、例えば、小鳥が何で自分でえさを捕らなきゃいけないんだ？お母さんがいつも捕ってくれればいいじゃないかっていう時に、親が、いやそれは無理なんだ。いつかお前は一人前になって自分でえさを捕れるようにならなきゃいけないんだ。だから今えさの捕り方を教えてるんだっていうのが、学校とか家庭の役割ですよね。

そのえさを捕れるように、鍛えていくのも一つの方法なんだけれども、でも自分が大人になって、もちろんご飯食べていくために仕事してるわけですけど、仕事して当然楽しい瞬間もあるわけですよね。

この仕事してよかった。こういうことしたくて僕はこの仕事を選んだんだみたいな瞬間が多々あると。そういうものを一つのモチベーションにする方法もあって、やっぱりその子どもに、小鳥になぜこう自分でえさを捕れるようにならなきゃいけないのかっていうことを言う時に、自分でえさを捕れるようになると、捕れた時、めっちゃ嬉しいんだよ。捕ってもらったえさよりも、自分で捕った方が 100 倍おいしいんだと。だから捕れるようになってごらんって言う。そういうモチベーションの与え方もあるはずで、そう言われた方が、自分で捕ってみようかとなる子もいるだろうし、自分でえさ捕れた時の楽しさ、嬉しさみたいなことを、どうにか伝えられないかなと。どうやったら次捕れるかなって、色々考える場合だって結構楽しいんだよ。チームでえさ捕ってみようぜとか、どの辺にいるかなとか、どうやったら調べられるかなとか、ワクワクしながら、えさを捕れるようになった時に、生きてて楽しいってなる。君達はこれから一人で生きていかなきゃいけないけれども、一人で生きていくのって楽しいんだよ。何か一つ我慢しなきゃいけないことがあるかもしれないけど、そこさえ我慢すれば、自分で自分のことを選んでいけるんだ。それはすごく楽しいことなんだ。ワクワクできるはずなんだっていうことを、具体的に、親とか先生が子ども達にイメージさせてあげられれば、もうちょっとワクワクできるはずで、やらなきゃいけないこと我慢してあげてもいいかもなって思えるような、何かに繋がるような気はしていて。勉強して色々嫌なことを詰め込んだ先に、自分で何か選んでいける、そういう楽しさがあるってことを言ってあげないと。パソコンのソフトの使い方を覚えなきゃやっていけないんでしょうみたいなことの先に何があるのかっていうことを具体的にイメージできるように言ってあげないと。例えば、何で覚えなきゃいけないの先に、ソフトの使い方を覚えて、仕事をちゃんと終わらしたら、そのあとコンサート行けるんだ、5時間かかってやってたところが2時間で終わったら、残り3時間楽しいことが待っているんだよ、というような。

生きていくってことは、辛いことだけではないんだよってことを、何でイメージしてもらうかっていうのが、すごく大事なことなんだろうなあって思いますし、僕は絵本作家として絵本でそれをできる方法を探りたいと思います。日々現場で子ども達と触れ合う先生方は、子ども達との関わりの中で、そのことを大人として見つけていくということが、一つ先生方にできることだし、僕は絵本を通じてということですし。色々な業種の人が、それぞれの持ち場を通して、「いや、結構楽しいぜ」とか、「楽しい仕事もあるんだぜ」っていうことを、どうアピールしていくかっていうのは、大事なことなんだと思うんですよね。

だから本当に色々大変なことも多い中で、どうポジティブなところを拾い集めて、ちっちゃなものでも拾い集めて、こう愛でていくかというか、面白がっていくか、共有していくかっていう、そういうちっちゃい、くだらないかもしれないけど、ちっちゃい楽しみっていうのは、絶対になくならないんだっていうことを、確認し合っていくっていうことが大事なことだなと思うんですよね。

そのために何ができるかって、生きていくことの希望をゼロにしないために、どんな希望は最後まで消えないのか。どういう好奇心は最後まで残るのかとか、そういうことを大事にして、それがその子にとってゲームなのか漫画なのかアイドルなのか、分からないですけど。一番自分が盛り上がるために何ができるか、逆に何を我慢しなきゃいけないのか、みたいなことを、具体的に組み立てていくというのが大事なんだなあと思いますね。

令和5年度幼児教育研修会より

かかわりの中で育つ子ども
～つながる心、広がる世界～

須永（すなが） 美紀（みき） 氏

【子どもを取り巻く環境】

人間も動物も、環境と私達は切り離すことができない関係性ですので、子どもが生活する環境を考えるというのは非常に大事なことだと思います。

この数年間は、何も気にせず、人と普通にかかわれるという機会がとても制限されました。改めて、子どもが小さいうちから集団で育つこと、過ごすことは、どんな意味があるんだろうということを教育に携わる者として考えていかなければならないと思うようになりました。

【これからの子ども達に求められる力】

これからの子ども達に求められる力は以前と変わっていると言われています。今まで予想しなかったことが起こる中、自分で考えることはもちろん、周りの人と協力して、問題や課題を解決していく力を、どうやって子ども達の生活や保育、教育の中で育てていくかというところが非常に重要になっています。

自分で考えて、他の人と協力したり、解決策を考えたりするベースには、例えば忍耐力や他者とのコミュニケーション力、社会性、自信、楽観性といったものがあると考えられています。そのキーとなるのが、子ども達が他者と一緒に生活することと考えられ、「同年代の同じような状況の子どもの集団は子どもの成長に影響を及ぼす」と、最近の研究でも分かってきています。

私達は、子どもの教育・保育に携わる者として、集団の中で子どもはどんな体験をしているのか、どんなふうに育っていくのか、小さい子ども達が一緒に生活することの意味をしっかり考えた上で、幼稚園や保育園、小学校、中学校、高校、大学と進んでいくそのベースをどう作るかを考えなければと思います。

【かかわりの始まり】

～大人とのアタッチメント～

一番大事にしなければいけないのは、大人とのアタッチメントがきちんと築かれるかというところです。最初は、主にうちの中で人と密接なかかわりをもちます。そのうち子ども達同士、自分と同じような他者と出会い、だんだんかかわりが広がっていくわけです。

その中で押さえておかなければいけないことは、大好きな大人との関係性がしっかりできることです。

アタッチメントは、特定の対象との間に築かれる愛情の絆と言われていて、この理論を最初に唱えたボウルビーは、乳児の欲求にタイミングよく適切な対応をしてくれる人との間で生まれるものとしています。

アタッチメントというと、親と子の間をイメージされるかもしれませんが、子どもは柔軟で、保育の場に行けば、自分とかかわってくれる先生との間に愛情の絆を築きながら園の生活を送っていきます。そういう意味で、園の中で毎日かかわる先生方、保育者の方々は、子ども達にとってとても大切な存在です。

大人との関係性の中でできていく大事なものは、「他者への信頼感」と「自己への信頼感」で、二つは表裏一体のようなものです。日々の生活の中で、子どもが自分に信頼感を持てるようになること。同時に、支えてくれる大人や一緒に生活している人に信頼感を持てるようになること、それらがとても大事であるということを意識しながら、私達大人がかかわっていくことが、小さい時期には非常に重要になります。

そして、この信頼感を持てていることが、友達とかかわりを深めたり、色々な活動にチャレンジできたりすることに、だんだんつながっていきます。

大人との関係は、世界の広がりを支える大切な軸となるのです。子ども達は大人との関係の中でしっかり気持ちが整っていると、あれは何かな、やってみたいな、と外への気持ちを広げ始めるところがあります。そうすると起こってくるのは、探索活動といわれる、色々なものを自分達で知っていこうとする活動です。

そこを私達大人が、子ども達をサポートしていくことによって、自分がしたいことができた、こういうことだったんだと分かり、達成感を感じたり自信を持てたりします。そして、自分なりに納得したり、学んだりしたことを、遊びや活動の中でどんどん積み重ねていきます。

【かかわりの広がり】

～大人との関係から子ども同士へ～

子ども同士のかかわりは、0歳児から

見られます。他の子どもに微笑みかけて、相手も笑い返す。離乳食を食べる場面で、友達がスプーンを落としたのを見て、自分も落としてみるなど、小さい子がかかわり合う姿は日常的に頻繁に見られます。

また、興味深いのは、他の子どもや場面に共振することからつながりが見られることです。

例えば、一人の子が空を見てぐるぐる回り始めると、一緒にいた子も回り始める。回ることから来る楽しさ、面白さで最初に回った子が笑う。すると、後からの子もやっぱり同じように笑いながら回り始め、「なんか一緒に楽しいね」という、身体の動きが同調することにより、共振してつながっていく、笑い合う場面というのがよく見られます。

言葉は関係なく、同じような年齢や月齢の子が一緒に生活する保育の場だからこそ、他児との出会いがあります。他児と同じ動きをする、そこから情動の共有やつながりの芽が生まれてきます。

一緒に歌ったり、子ども達が好きな絵本を見たり、手遊びをしたりとか、楽しいことを共有する色々な場があることで、そこを楽しいと思い、何かあった時にそこにひきつけられるように戻っていくこともあります。やはり自分の居場所は、楽しいことがあって、好きな人がいて、居心地のいいと感じられる場所でしょう。

同じような年齢の子が複数いて、保育士がいて、一緒に暮らしていく集団があってこそ、他者と一緒にいることの良さを感じられる、そういった雰囲気のある場所であることが大事だと思います。

2歳半くらいになると、どんどん子ども達はつながり始めます。友達を自分と同じような存在だと分かり始めるので、一緒に同じことをしたいと強く思うようになりますから、そこからトラブルになることも結構あります。

そして、遊びの中で友達とのかかわりが盛んに見られるようになるので、子ども達同士気持ちをつなげるという点では、相互に模倣しあってつながりあう所を、私達大人がしっかり見てあげるというこ

とが大事だと思います。

他者とのかかわりや理解も、0歳や1歳の時とは変わっていきます。

前はおもちゃを奪い取ってしまって相手が泣いてもどうしていいか分からない。しばらくそこにたたずんで、そのまま踵を返して自分の遊びに戻ってしまうというようなことがありましたが、2歳半すぎくらいになると、相手がどう感じたか気にするようになってきます。おもちゃを奪ってしまっても、しばらくしてからごめん、これ使っていいよと返しに行ったりすることが見られるようになってきます。

このように、一緒に暮らすうちに、自分のことだけではなく周りの人がどうなのか、どう考えているのかを感じながら行動するようになってくるのです。

この年齢を通り過ぎていくと、だんだん一緒であることが大事な時期がやってきます。いつも同じメンバーで行動して、同じ人と遊ぶようになったり、同じ物を持っていること、同じことをするということがすごく大事になったりします。

一方で、一緒にいたいけれど、遊びたくない場合も出てきます。例えば、いつものメンバーでは、お母さんごっこをしているけど、私はボール遊びをしたいんだけどな。でも、遊ばないって言うと裏切り者のように怒られたりするからどうしようかな、といった悩みも生まれてきます。

友達のことは大好きで一緒に居たいけど、やりたいことが違う場面が生まれてくるのもこの頃からというのが見ていてよく分かります。ですから、私達大人の方も、好きだけどやりたいことが一緒じゃない、ということも仲よしには違いないよ、ということを色々な方法で子ども達に伝えていってあげたいと思います。

もう少し大きくなってくると、さらに友達との関係性、仲間との関係性に、子ども達なりの葛藤が芽生えるようになってきます。3歳児の事例をみてみましょう。

3歳児を一言で言うと、万能感、有能感にあふれています。自分は何でもできると思っているので、ペットボトルの入った段ボール箱を持ち上げていると、子どもが「自分が手伝ってあげる、やってあげる」と言ってくれる。本当はできないけれど、できると思って「やる」と言ってくれるわけです。

この頃は、周りからの「素敵だね」、「すごいね」って言ってもらえる、そういう言葉に励まされて、自分が有能感を十分に味わっている時期と思います。

4歳児になると、できることとできないことが自分で見えるようになってきます。自分はこうありたいんだけど、そうできないっていうことに苦しむとか、葛藤を感じる。4歳児くらいで実はそんなことを考えながら日々の園生活を送っているということなんですね。

それは、先生達に心の中の思いとして吐き出される場合もありますし、自分の中に秘めてどうしようかなと考えながら生活している場合もあります。強いもの、大きいものに非常に憧れるという所も4歳児の特徴の一つといえると思います。自分と他者が同じなのは楽しいが、違いがきっぱりはっきり見えるようになってくるというのが、このあたりの年齢です。

すると、当然起こるのが比較ということになります。一人一人がもちろん違っていいんです。けれども、違うことで自分がどうなのかを考えざるを得ない、そういう状況になっていく年齢です。

私達かかわる大人が、その子の良さをどうやって見つけて、周りの人に知らせてあげるかが、大事なポイントではないかと思います。なおかつ、ここでそれぞれの良さがちゃんと周りの子ども達にも伝わるようなクラス経営をすることで、もうちょっと大きくなっていった時にクラスの中での自分の役割や自分のできることを自分なりに考えて行動していく姿が見られるようになります。

そして、友達との間で理解がどんどん深まっていきます。

5歳児が友達と言いあいをした後に部屋の隅に行ってしまったんですね。声をかけようとしている友達を見て、ある男の子が「いや、今は一人でいたいんだよ、そっとしておかないと」と言う。

5歳の子どもが、友達がそこに行ってしまった気持ちを考えて、こういう時はこうしてほしいだろうな・してほしくないだろうなと考えて言える。そこまで子ども達は就学前に育ってきているのです。

また、「こういう自分になりたい」「こんな自分はイヤだな」という気持ちもあります。小さい時からの積み重ねによってこういう気持ちまで持てるように、子ども達同士の中で育っていきます。

【他者とのかかわりから生まれるもの】
～新しいアイディア、広がる世界～

かかわりの育ちとともに、子ども達の世界は豊かな広がりをみせるようになります。

「新しいアイディア、広がる世界」として、仲間とともに活動をつくり出していくという姿を見たいと思います。

一般的に就学前の時期になると、グループやクラスの中で協力しあうとか、役割を分担しあうことが望まれます。また、一つの目標に向かって見通しを持って自分達なりに取り組むなどが期待される姿といえると思います。

イメージを共有したり、その共通のイメージをどう実現して形にしていこうかをみんなで考えたりする。そういった所も活動の中で大事にされる部分ですし、ゲームとか競争に取り組んで、喜んだり悔しがったりするような姿も見られてくるというのもこの時期の大きな特徴であるといえます。

保育園、幼稚園というのは、子どもとかかわりながら、先生も一緒に、自分達の知らないことがどうなっているのかを自分達なりに探究して、その答えを見つけていくという営みを日々やっている場所なわけです。そこをどう捉えて、子ども達の世界を大人がどう意味づけてあげるかが重要であり、子どもの育ちにつながっていくのではないかと思います。

友達と一緒にやるからこそ、広がっていくもの、味わう世界があります。他者の考えや気持ちに日々触れながら、生活や活動の中で課題をどうやって解決していこうかをみんなで考えていくのが保育の場です。ですから、先生も含めて、みんなで一緒に一つのことを考え、色々なことをやってみて、こうしたらいいよねって生み出していく。そうしたことを小さい年齢の時期から大切にしていくことで、きっと将来子ども達が生きていく世界の中でその力が生かされる。生かされることによって、自分達が生きていく世界がもっとよくなっていくという所につながっていくのではないかと思います。

乳幼児期の子ども達が一緒に過ごすことについて、大人があたたかい眼差しで見守ってあげる。そんな大人が増えれば増えるほど、子ども達の世界も充実したものになっていくと思います。

茅ヶ崎市小学校中学校　創意工夫・研究作品展のお知らせ

New!! 令和6年度
第53回 作品展のご案内

令和6年度は、第53回を迎えます。小・中学校の先生方が中心となって運営し、各学校を通して作品を募集します。茅ヶ崎市在住、在学であれば、私立の小・中学校に通う児童・生徒の作品も受け付けています。

作品展の開催日時・会場

❑学校代表作品については、9月13日(金)・14日(土)・15日(日)の3日間 、茅ヶ崎市青少年会館1・2階に全作品を展示します。

❑金・銀・銅賞受賞作品については、市ホームページにも10月上旬から 1 か月程度公開を予定しています。

2つの部門

作品展には2部門あります。

❑ **創意工夫作品部門**

普段の遊びや生活の中から、こんなものがあったら便利だなと思うことを工夫して作り出したもの。

❑ **研究作品部門**

理科的な内容や社会科的な内容など、観察や実験、調査したものをまとめたもの。

作品応募の手順

①夏季休業等を利用して創意工夫作品を製作、または自由に課題を選び研究します。

②作品は各学校の担当の先生に出品します。(ただし、茅ヶ崎市在住、在学で私立の小・中学校に通う児童・生徒の皆さんは、直接教育センターへの出品となります。)

③各学校(教育センター)での事前選考で選ばれた作品が作品展に出品されます。詳しくは、7月上旬に教育センターホームページにご案内を掲載します。

令和5年度
第52回 作品展の様子

令和5年度の第52回作品展にも素敵な作品が集いました。

情熱・疑問・好奇心!生み出そう
こころのそうぞうタマゴ
想像と創造のこころ

出品作品数は、各学校から選ばれた創意工夫作品部門108作品、研究作品部門146作品、計254作品でした。4年ぶりに全作品が茅ヶ崎市青少年会館1・2階に展示され、金・銀・銅賞受賞作品については、10月に市のホームページでも公開しました。

創意工夫作品部門金・銀・銅賞受賞作品が「第82回神奈川県青少年創意くふう展覧会」へ

創意工夫作品部門金・銀・銅賞受賞の18作品が、第82回神奈川県青少年創意くふう展覧会(主催:神奈川県／一般社団法人神奈川県発明協会)に出品され、結果は次のとおりでした。

今年度は、特別賞に3作品、優良賞に6作品が選ばれました。

【神奈川県知事賞】
「①(目薬)点眼補助・②優しい手・③自分で靴下を履く自助具」
鶴が台中学校2年　石田　雅楽さん

9月15日・16日・17日の3日間開催され、延べ 1509 名が来場されました。

【毎日新聞社賞】
「ゆびのかんしょくで遊べる‼キューブパズル」
緑が浜小学校3年　岡　拓真さん

【神奈川県発明協会会長賞】
「まるで自転車のサイドミラー?!グローブミラー」
今宿小学校5年　星野　瑞季さん

【優良賞】
「HELP シュート」
鶴嶺小学校2年　鵜養　桂汰さん

【優良賞】
「かんたん!!サンドブロック」
緑が浜小学校4年　小嶋　海路さん

【優良賞】
「ゴミつぶしオクトパス」
鶴が台小学校4年　加来　風花さん

【優良賞】
「ストレスゼロＨＧ（ハンガー）」
鶴が台小学校5年　丸山　珠璃さん

【優良賞】
「食べられるストロー　スークー」
緑が浜小学校6年　吉竹　広太さん

【優良賞】
「SDGs起き上がりサポーター」
松浪中学校1年　多那　晴都さん

「第82回全日本学生児童発明くふう展」へ

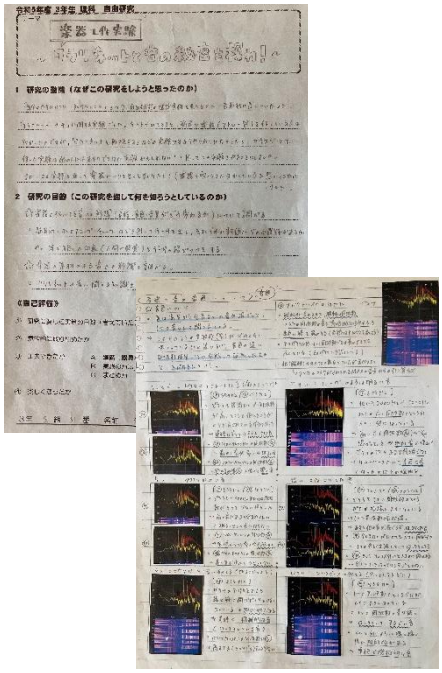
第82回神奈川県青少年創意くふう展覧会で、特別賞の神奈川県知事賞を受賞した鶴が台中学校2年の石田雅楽さんの作品が、第82回全日本学生児童発明くふう展（主催：公益社団法人発明協会）に、出品されました。

研究作品部門優秀作品が「第40回全国小・中学生作品コンクール」へ

研究作品部門優秀18作品が、第40回全国小・中学生作品コンクール（主催：子どもの文化・教育研究所）に出品され、結果は次のとおりでした。

今年度は、理科部門：全国中学校理科教育研究会会長賞に1作品、生活科部門：中央出版株式会社社長賞に1作品が選ばれました。

【理科部門：全国中学校理科教育研究会会長賞】
「[楽器工作実験]クラリネットと音の秘密を探れ！」
第一中学校3年　松田　こはるさん



【生活科部門：中央出版株式会社社長賞】
「空のカラーハンティング」
浜須賀小学校2年 原田 あさひさん

青少年教育相談室から

一人で悩まないで、ご相談ください

生活する中で勉強、友だち関係、進路等いろいろなことについて悩み、不安を感じることは誰にでもあることです。そのようなお子様の様子に気づかれたり、お子様から相談を受けられたりした時には、お一人で悩まれずに、本センターの青少年教育相談室をご活用ください。

お子様自身の悩みや保護者の方々の悩みに寄り添い、ご相談に応じています。

次の「相談の方法と内容」のとおり、電話相談や面接（来所）相談等を行っております。相談の秘密は守ります。

まずは、お気軽にお電話ください。

相談の方法と内容

1　電話相談

【一般教育相談・青少年相談】
電話：0467-86-9963・9964

学習や友だちとのこと、親子関係、問題行動や将来への不安など。

【「こころ」の電話相談】
電話：0467-57-1230

学校に行きたくても、行くことができない、いらいらしたり、落ち込んだりする、お子様の不登校にどう対処したらよいか分からない、など。

【「いじめ」電話相談】
電話：0467-82-7868

いじめを受けて心が苦しい、友だちがいじめられていて心配している、など。

【「そだち」の電話相談】
電話：0467-86-1062

学習のつまずきが気になる、集団での活動が苦手、落ち着きがない、など。

2　面接（来所）相談

電話：0467-86-9963
（予約制）

いじめ・不登校など、電話では相談しきれないことやじっくり時間をかけて相談したいことなどについて、専門の心理相談員が、問題解決に向けて一緒に考えます。小・中学生や保護者などを対象として、継続的な相談に応じています。まずは、電話で予約をしてください。

3　小・中学校要請教育相談

青少年教育相談室での面接相談を受けている小・中学生を対象として、保護者の要請により、専門の心理相談員が学校を訪問します。

お子様の様子を把握し、学校の先生と相談を行います。

電話相談・面接予約

● 月曜日から金曜日
（祝日及び年末・年始を除く）
9時から18時まで
※17時から18時は、
電話：0467-86-9963 でのみ
受け付けます。

不登校児童・生徒訪問相談

不登校あるいは不登校傾向にあり、なかなか外に出ることが難しい小・中学生のご家庭に、訪問相談員が訪問して相談を行います。

相談活動を行うことで、登校への不安を和らげ、お子様の生活状況の改善を図ります。

相談スタッフ

青少年相談員・一般教育相談員・心理相談員・訪問相談員

あすなろ教室とは

何らかの原因により学校に行けない状態にある小・中学生の居場所です。在籍校と連絡を取りながら、学校への復帰や社会的自立に向けて、自分らしさを大切にし、生活のリズムや習慣を取り戻せるように支援しています。

通室生は、一人一人が課題を決めて自分のペースで学習を進めるだけではなく、ゲームや体験学習といった興味を持って楽しめる活動を通して、視野を広げたり、人間関係を作り上げる力を養ったりしています。

＜あすなろ教室　共同作品＞

心の教育相談室とスクールカウンセラー

各学校にはお子様がホッとできる相談室があります。そこには心の教育相談員が在室しており、お子様の話し相手になったり、いろいろな相談を受けたりしています。お子様の悩みやストレスを早期に発見・対応し、お子様が安心して学校生活を過ごすことができるように努めております。

また、月に数回、スクールカウンセラーという心理の専門家が勤務しており、お子様の様子や子育て等に関して、児童・生徒、保護者を対象に相談を受けています。

相談希望のある保護者の方は学校にご相談ください。

【青少年教育相談担当☎86-9963】

青少年教育相談室のページはこちら